大陸（南支）

戦争と我が家、悲嘆の十年

宮城県　三條　類　三

昭和十四（一九三九）年、日支事変が泥沼しつつある時、我が家では父と母、祖父母、長兄夫婦それに十八歳になる三兄、小学高学年の妹と卒業間近の私、そして次兄は朝鮮羅南山砲隊に入営中だったが近郷にも稀な三代にわたる夫婦揃いの幸せな家庭であった。

そこへ三月、中国厦門（アモイ）で貿易商を経営している叔父夫婦が一時帰郷して来た。それを機に私は叔父の仕事を手伝いすることになり、東京にいる従兄弟と二人で叔父夫婦に同行したのであった。

当時、厦門は占領間もなく、街の要所々々には銃を持った兵隊が立っていた。そのうちに中国の市政府も業務を開始して警察隊も組織され、日本軍に代わり中国の警察官が立つようになり、治安の回復と共にいつとはなしにその警官の姿も見えなくなった。私達も仕事にも馴れ、片言の中国語も話せるようになって楽しい毎日であった。盛況期には日本人は三千人、台湾邦人七千人と、市街のどこへ行っても心配なく遊んで来られ、外地にいるような感じはしなかった。

しかしながら郷里の我が家では昭和十五年十月、長兄の病死、前後して次兄の戦死、そして十八年三兄が高田山砲隊に入営、次いで七十歳の祖

父の死亡と続き、悲嘆のどん底のようであった。しかし父や兄嫁、三兄からの便りでは、いつも家のことは心配するな。頑張れ、頑張れの便りばかりで、私もそれを信じて安心して仕事に精を出していた。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発となり、香港、シンガポール、スマトラ占領、マレーシア沖海戦と戦果が華々しいうちはよかったが、昭和十七年末頃から、だんだん便船の入港が少なくなり、内地や台湾に出張した人達が帰って来なくなった。海上で敵潜水艦に沈められ死んだらしいと言う噂が流れるようになり、何となく不安になって来た。そのうちに食糧や必需品も配給制になり、生活も不自由になり、商売もやりにくくなってきた。

昭和十八年、私も来年は徴兵検査であるが、当初は厦門で受験をとも考えていたが、郷里の様子も見たかったのと、叔父夫婦からもこの際内地へ帰って検査を受けてはと言われ、郷里に帰って検査を受けることにした。私にしろ叔父夫婦も微弱な体格で、どうせ不合格になりすぐ戻って来られるという気安さもあった。

昭和十九年一月、渡航手続きをして待ったが一向に便船が来ないので、当時、叔父が軍の用達しをしていた関係で一〇〇トンたらずの軍の用船に乗せてもらい基隆港に向かった。しかし夜中に時化に遭い、澎湖島の海軍の要港に入港し、そこで客船に乗り替え台湾の高雄港に上陸した。

高雄と台南にはそれぞれ叔父がおったので一泊ずつして、基隆で神戸行きの便船を待つ間、五日程滞在した。神戸まで三日位で着くところを五日かかってようやく無事に着いた。東京で手荷物の来るのを待って二泊し、通常五日位で着くところ二週間もかかり、我が家に着いたのは二月の末であった。

当時我が家では父と母、祖母、女学校在学中の妹、兄嫁と三歳になる女の子と六人家族であった。私が帰ったので家は急に明るくなった感じであった。

しかし高田山砲隊に入営中の三兄が、勤務過労で陸軍病院に入院中であって、私が帰ってから二十日目に戦病死の公電が入り、私が帰って喜んだのも束の間、またまた我が家は悲嘆のどん底に陥った。その後、いろいろの事情もあって兄嫁が三歳の子を置いて実家に戻り二度と帰っては来なかった。父や母は再三復縁を願ったが、遂に三歳の子を置いたまま帰らなかった。

私は徴兵検査の結果、第二乙種合格であった。いずれ令状が来るものと覚悟して、二町歩の田畑は近所の農家に耕作を委託し、農馬も売払い、入営準備をしていた。親類達の手伝いで、ようやく稲刈りも終わる十月六日、仙台に集合の召集令状が入った。六日の朝は母が赤飯を炊いて祝ってくれ、私は二十歳とは言え、いまだ幼な心と無邪気さもあった。長い食台を囲み、皆で座り、黙々と箸をとる。

私は父や母達に「無理をしないように」と言いたかったし、父や母は私に「体に気をつけろよ」と言いたかったのであろう。言おうとして声が出ず、語ろうとして話にならず、声を出そうとすれば目がうるむ。互いに涙を見せまいとして、ただ黙々と箸を運ぶ。父や母の脳裏にはこの五年のうちに息子三人を失い、七十歳の老父を亡くし、それにこの家の中心になって支えて来た嫁に三歳の女の子を置いて去られ、今また目の前にただ一人残った息子が兵隊に征く。生きて帰れるだろうか、これが最後の共にする食事なのかと思う時、父や母の心中やいかに、恐らく胸が張り裂けんばかりであったろうと思う。

厦門から帰って九ヵ月、お互いに涙も見せずに生活して来たのに。今、当時を想像して、このことを綴る時、とめどなく涙があふれ、手がふるえて、ペンが進まぬ。嗚呼駄目だとペンを捨てる。

でも今書かなければと、老体に鞭打って再びペンを執る。

涙ながらの朝食をすませ、簡単な身の廻り品を風呂敷に包み、家族や親戚の方々、そして近所の方々に見送られ、父と共に壮行会会場の学校に来て見ると校長先生や生徒さん達が全員整列していた。この日の入営者は同級生の三人だった。そのうちに町長さん、在郷軍人会や国防婦人会の方々も大勢見送りにこられた。町長さんおよび校長先生の激励の挨拶、入営者代表のお礼と決意の挨拶が終わり、皆さんに見送られ我が町を出発した。仙台の西公園に来て見ると大勢集まっていた。仲間達は輪になって両足を奮張り両手を振り振り大声で軍歌を歌っていた。歌っていたというより叫んでいたと云うのが本当であろう。私達もいつしかその仲間に入った。

周りには見送りに来た家族が淋しそうに作り笑顔でじっと見守っている。受付を済ませ係員の指示で整列して見ると三十人位であったと思う。係員の合図に従って無表情で仙台駅へ向かった。見送りに来ていた家族の方々は、力なく手を振る人、首をたれそっと背を向けて肩をふるわせている人、万感こもごもであった。

翌日、門司に着き、ここで二人三人と別れて二晩民家に泊まることになった。私がお世話になった家は御夫婦二人だけの家庭で、物不足の時なのに毎食立派な食事で感謝にたえなかった。ここで一緒になった方が北村の生出裕さんで、この方とはこの晩から復員するまでどこへ行っても行動を共にして、夜は必ず枕を並べて寝、復員後は平成元（一九八九）年、二人で戦友会を組織して、会長さんを支えてまた役員として共に現在も活躍中である。

ここで簡単な体格検査と検疫をすませ、軍服に着替え、三日目の早朝、下関港から釜山港に着き、ここからはっきりした行先も告げられず汽車に乗ることになった。ここで福島県、新潟県の人達と一緒になる。汽車で行くなら周りの景色も眺

められると思っていたら、どこも見えないうす暗い貨車の中に二十人位ずつ、寝起きもやっとの鮨詰めにされ、食器として渡されたのは、竹筒二個ずつで、全く犬猫同然の扱いだった。

京城（ソウル）、平壌、鴨緑江を渡り、旧満州の奉天（瀋陽）、中国の天津、南京と、着いた所が杭州だった。ここで寧波へ行った組と二隊に別れた。ここから本当の軍隊生活の始まりである。実に想像を絶する窮屈な別世界であった。ここで十二月末まで軍事訓練を受けて、十二月の末に本隊に行くため上海に集合して正月を迎え、一週間程滞在して、本隊から初年兵受領に来た下士官に引率されて小さな貨客船に乗り温州に着き、ここで砲兵部隊の本部の第一中隊と第二中隊の段列とに分かれた。この船の中でシラミがうつり、本隊に着いてからひどい目にあうのである。

私共十人程は中隊段列に配属になり、ここから二キロ程離れた第一中隊へ毎日野砲の操作訓練に通った。二ヵ月程して段列は解隊となり、第二中隊と二組に別れて配属になった。六月の末温州を全面撤退することになり、陸路を十一日程かかり着いた所が奉化県詔興であり、ここで終戦となった。

毎日何もすることがなく、クリークが渇水して魚が沢山いるから、各班から四、五人ずつ出て水をくみ出して、南京袋で四個程魚を捕まえた頃、本部から直ちに集合すべしとの非常呼集の伝令が飛んで来た。何事かと急いで裏の池で泥足を洗い広場に集合すると、本部副官から、はっきりしたことは判らぬが戦争は終わった。我が国は全面降伏したようだと。一瞬しーんとした。その中に怒号や怒声が聞こえ、すすり泣きも聞こえた。私達は放心状態になり、その場にうずくまるばかりであった。

そのうちに「直ちに出動準備をせよ」との命令が出て、力無く身の廻りを片付けて、その日も暮れかかる頃出発命令が出て、どこをどう歩いたの

か夜通し歩いて、翌朝広場を見ると、そこには相当の部隊が集まっていた。そこから大部隊の行軍が始まり、これからが本当のみじめな敗残兵である。

六頭の馬で曳く筈の砲を二頭で曳き、後方には銃を逆さまにかついだり、帯革を両肩に掛けて横にかつぎ、力ない足どりで延々と続く大部隊の行軍である。二日程行軍し、途中から貨車に乗り、着いた所が上海の陸軍病院の大広場であった。ここで帯剣をはずし、持って来た銃を無造作に積み重ね、初めて身軽になり、本当の人間らしい感じだった。

ここに一週間程滞在して、帰還船を待つために呉淞の倉庫のような所で大集団の生活が始まった。

たまに使役に狩り出されるぐらいで、何事もなく過ごすうちに昭和二十一年の年明け早々、帰還船の第一便が出たというニュースが入って、毎日いつの日に帰れるかの話題で暮らすうちに、一月の末に乗船することができた。アメリカの上陸用舟艇で、着いた所は佐世保だった。

翌朝甲板から祖国の山野の緑を見て皆歓声を上げて抱き合って喜んだ。ここで検疫や復員手続きをすませ、途中で食べるおにぎりと米若干と旅費を支給され、長崎駅から鮨詰め列車に乗り、仙台駅に着いたのは夜の九時頃であった。寒くてホームにもいられず、駅前の交番の灯が見えたので生出さんと相談してここへ飛び込み、駐在さんに心良く迎え入れられて、ストーブを囲み、持って来たおにぎりを三人で食べて一晩お世話になった。

翌朝一番列車に乗り、生出さんは生家の近くの前谷地駅で別れ、私が鹿ノ又駅から四十分程歩いて家に着いたのは二月六日の午前十一時頃であった。黙って障子戸を開けて今帰ったと声を掛けると、囲炉裏の側で父と母、近所の人が来て茶飲み話し中で、皆はびっくりして声が出なかった。早速上がって「お陰様でこの通り無事に帰って来ま

した」と挨拶すると、父はにっこりと、母は涙を流して声が出なかった。早速風呂を沸かしてもらい入った。

湯のぬくもりは一年半ぶり、我が家の風呂の中で、もうもうと立つ湯煙りの中、一年半前の悲痛な想像は全く浮かばなく、ただもんもんとするばかりであった。その夜は初めて家族六人揃って楽しい食事ができ、夢のようだった。私の第二の人生はここから始まった。

戦後の何もかも不自由な時代であったので、無理をせずに、元の二町歩の田畑に戻し、平凡な人生を送ろうと心掛けた。復員した翌年結婚し、息子二人を得、八十歳の今日まで大過なく長生きできたのは最高の幸と思う。

長兄の娘も私の娘と思い幸せな結婚をさせ、二人の息子もそれぞれの家業を継ぎ、堅実に経営しており、内外七人の孫たちも立派に成長して社会人となり活躍中である。八十歳の今日、池の中の浮草のような心境で、この原稿を綴ることのできるのも、五年間の厦門の生活体験と、一年半の軍隊生活、それに戦後の不自由な人生経験に耐えて来たおかげと思う。

最後にいかなる理由があろうと絶対戦争はしてはならない。戦争の犠牲者は善良なる住民だけである。戦争に正当性や正義という論理は成立しない。

【解　説】

昭和十四年の我が家は、父母、祖父母、長兄夫婦、それに十八歳の三兄、小学校高学年の妹と卒業間近の私、次兄は朝鮮、羅南山砲隊入営中で、近郷でも稀な三代にわたる夫婦揃いの幸せな家庭であった。

そこへ三月、中国厦門で貿易商を経営している叔父が一時帰国した。私は叔父の仕事を手伝うため叔父に同行し中国へ。私も仕事にも馴れ、中国語も話せるようになり楽しい毎日であった。

しかし、我が家では長兄病死、三兄は高田山砲

連隊に入営、七十歳の祖父は病死と続き、悲嘆のどん底。しかし、家からの便りでは、いつも家のことは心配するな、頑張れの便り、私もそれを信じ仕事に精を出していた。

昭和十八年、徴兵検査で故郷に帰る。昭和十九年一月、渡航手続きをして待っていたが、一向に便船が来ないので、台湾高雄経由で帰宅したが、三兄が陸軍病院で病死する。私の検査は第二乙種であった。十月六日、召集令状が来て仙台へ召集された。

私は、父や母に「無理をしないように」と言うと「体に気をつけろ」と、親子は言いたかったが、万感胸に迫るものがあって、言葉にさえ出せなかった。

朝鮮・奉天・中国・天津・南京・杭州と軍隊生活に入る。覚悟はしている軍隊生活だが、想像に絶する生活であった。我々十人は中隊段列配属、野砲の訓練、六月末、温州を全面撤退、陸路十一日程かかり着いた所が奉化県詔興であり、ここで終戦となった。我が国は全面降伏した模様で、我々は放心状態となり、その場に、うずくまるばかりであった。

昭和二十一年の年明け早々、帰還船で、佐世保～仙台、家に着いたのは二月六日午前十一時、父はニコニコして、母は涙を流し声が出なかった。

その夜、初めて家族六人揃って食事、夢のようであった。その時、戦後は平凡な人生を送ろうと思い、以後、それを心掛けてきた。

復員翌年結婚、息子二人、八十歳の今日まで大過なく長生きできたのは最高の幸せである。

外地の生活、戦争の幸、不幸を分けた体験、戦死、戦病で帰らぬ人となった戦友も多い。自分たち家族と共に、この幸せ、日本の幸せが永く続くことを祈るものである。